

土木学会の 100 周年にあたって



藤野陽三
論説委員
東京大学大学院工学系研究科
総合研究機構特任教授

土木学会が創立されたのは 1914 年 11 月 24 日で、本年は 100 周年にあたる記念の年となる。

100 周年記念として様々な事業や行事が全国規模で計画され、すでに実施されているものも多い。11 月 21 日には記念式典、祝賀会を東京で開く予定である。関係する数十名を越えるメンバーは全国の支部を飛びまわり、また多くの会合を重ね、様々な記念事業の実施に向けて大変な努力をしてきている。私はその責任者として、多くの方に行事に参加いただき、式典では 100 年をお祝いするとともに、未来の土木に向けての決意を新たにすることを期待している。

土木学会は 100 年を迎えるが、年代的には他の工学系の学会に比べて決して古いわけではない。日本鉱業会が 1885 年に発足し、130 年近い歴史を有する。日本建築学会が翌年の 1886 年、あと続いて電気学会、日本機械学会、工業化学会なども、あとで述べる日本工学会から離れる形で続々と独立していった。土木は古くからある学問にもかかわらず、学会の発足が遅れた。なぜそうなったのか？ それは日本工学会から独立したのが最も遅かったからである。

旧工部大学校（現在の東大工学部）の土木、電気、機械、造家（建築）、化学、鉱山、冶金の 7 学科第 1 期卒業生 23 名が相互の親睦、知識の交換を目的として 1879 年に創立したのが日本工学会である。日本でもっとも古い学会は日本数学会社（学会という言葉がまだなかったものと思われる）で、その創立が 1877 年、日本化学会が 1878 年であり、日本工学会は少し遅れたがほぼ同時期にスタートしている。福沢諭吉の「学問のすすめ」や「文明概略論」などが刊行された少し後で、学問を通じて国を築き上げて行こうという機運が高まっていた頃で、それが学会の創設にもつながったのであろう。日本では工学の重要性が強く認識されていた証として、帝国大学のはじめから工学部が設置され、日本工学会も帝大卒のエリートが会員の中心であったことは、欧州の工学系の学会とはやや異なる点である。

土木工学者で実務家でもある古市公威は工部大学校の教授、学長や貴族院議員を務め、日本工学会でも会長を歴任した。日本工学会の主要メンバーが土木出身者だった中で、上に書いたように、建築、機械などが次々と学会として独立し、土木だけが日本工学会の中留まる形となった。時代の趨勢の中で専門の細分化が進んだのである。周りからも土木学会の創立を促されたが、古市は断り続けていたという。それは、土木は工学そのものであり、あらゆる工学を自在に使うことを成し遂げるのが

土木の本質であり、その土木が日本工学会から離れ、土木学会を結成すると、土木もおのずから細分化の道を進むことをひどく危惧したためである。古市は、東大の前身である開成学校を卒業後、すぐにフランスに留学し、エコール サントラルに学んでいる。フランスの工学教育は「工学は一なり。工業家たる者はその全般について知識を有せねばならぬ」という考えであり、その影響を受けていることは確かであろう。当時の工部大学校の土木工学科には「工芸経済学」、「土木行政法」の講義があった。土木を学ぶ若き徒に幅の広さを植え付けようとさせていたかが理解できる。

細分化の流れは学術の発展進化から見たときは極めて自然であり、古市もそれに抗しきれず、土木学会が 1914 年 11 月 24 日に創設された。1915 年 1 月の第一回総会での古市公威初代土木学会の会長の就任演説は、古市の土木に対する考えを正直に表したものとなっている。土木技術者は「指揮者を指揮する人」、「将に将たる人」たかねばならぬことを力強く述べ、土木学会会員に「研究の範囲を縦横に拡張せられんこと」を、そしてそれと同時に「その中心に土木あることを忘れられざらんこと」などが滔々と述べられており、土木の本質を語るにふさわしい演説となっている。

土木学会は確かに日本工学会から独立した形で発足したが、古市としては日本工学会を引き継ぐ形で土木学会が生まれたという気持ちではなかったのか。とすれば、土木学会は今年 135 周年を迎える、日本でもっとも古い工学系の学会であり、あらゆる工学領域とリンクを持った工学の核となる学会として存在すべきということになる。

この 100 年の間、明治の近代化、関東大震災、いくつかの戦争を経て高度成長の時代に突入り、わが国は目覚ましい発展を遂げた。土木の貢献は大きなものであった。この 30 年は国としての成熟期を迎える中で、環境を保持し、自然災害からの復興や将来への備えをしつつ、持続可能な社会への移行が大きな課題となっている。我々が抱える問題の特徴は複雑に絡み合っており、その傾向は時とともに増すばかりである。科学・技術の活用は不可欠であるが、かつてのように、ある一つの技術が問題を解決することは期待出来ないように思われる。細分化された様々な技術を理解し、翻訳し、経済や政策、そして現地や現場の状況を把握して解を考え、社会に示すことが要求されている。これは、古市公威が 100 年前に主張した土木像に非常に近い。土木の不変性を感じる。

11 月 21 日に予定されている 100 周年記念式典では磯部雅彦次期会長による「100 年宣言」が行われる。改めて土木の地平が語られることになろう。大いに期待していたきたい。

（古市公威による土木学会会長就任演説は 100 周年記念事業のホームページに掲載しています。
<http://furuichi.jsce100.com/original.html>）